



中国の視線、 関係国の視線 から見たBRI

川島真（東京大学）

報告要旨

- 米中対立の下で、技術問題、経済問題とともに地政学的な観点に基づく議論が多くなされるようになった。
- 当初は一帯一路（BRI）とTPPを対置する議論が多かったが、次第にBRIと自由で開かれたインド太平洋（FOIP）が両者の対抗軸のように言われるようになってきている。
- しかし、日本政府は両者を必ずしも対立するものとは捉えず、協調可能としている。本報告では、第一に中国の一帯一路をいかに捉えるかということ、第二にその一帯一路とFOIPとの関係性について考察する。

中国から見た世界秩序

(写真削除)

- 1. 既存の世界秩序に敵対する、とは言わない。
 - 1) 国際連合、国際法は支えるし、従う
 - 2) アメリカを中心とする安保体制、価値観は支持しない。
- 2. 世界経済貿易秩序も支持する。
- 3. 発展途上国の代表という自己認識。
 - →先進国の形成してきた秩序に対しては「修正主義」

中国の想定する世界秩序像

- 1. 新型国際関係：

- ウィンウィンの経済関係、
- パートナーシップ → 運命共同体
- (民主主義を媒介にしない関係)
- 一帯一路は新型国際関係の実験場

- 2. 新型大国関係：

- 中米関係のために準備。協力協調、ただし核心的利益尊重し合う。

- 3. その他の地域秩序観

- アジア新安全保障観など

(写真削除)

シャープパワー (非対称性により生じる)

注意しなければならないこと。

- 1) 基本的にレシプロシティが意識されないこと。
- 2) 世界が自由であること：中国に有利
しかし、その同じ自由を外国には与えない。
例) 中国は先進国で自由に宣伝、先進国は中国で自由に文化活動ができない。
例) 相手国に非関税障壁が少ないことを中国は歓迎。しかし中国は同じことを与えない。

*** 自由でリベラルな先進国ほど中国には都合の良いターゲット**

- 3) 中国国内から外に出られない。ネット空間も。サイバー主権。

*** 国内から最も自由に外にでられるのは政権中枢。**

(図表削除)

中国にとっての海上防衛とシーレーン

- 1) 沿岸部防衛：東シナ海、南シナ海
 - 1-2) マラッカ海峡など諸海峡の防衛
- 2) アフリカ、
中東からインド洋の港湾ネットワーク構築
 - 2-2) 港湾確保
 - (グワダル、ハンバントゥタなど)
 - 2-3) パイプライン建設
 - 2-4) ジブチの軍事基地

(図表削除)

一帯一路について

- 胡錦濤時代の周辺外交の組み合わせ
- インフラ投資（道路、鉄道、港湾など）
（輸銀、開発銀行、シルクロード基金）

- 経済を基礎とした世界展開。
政治、経済はその後からついていく。
- 秩序、規範がともに拡大、との観点も。

安倍総理の提起した4条件：

→中国のまず。G20で事実上受け入れ。

(図表削除)

(図表削除)

現在の「一帯一路」

- 1) 拡大する「一帯一路」(北極、大西洋、カリブ海、太平洋など)
- 2) 世界からの批判
 - ①債務の罾という批判
 - ②軍事、政治目的という批判
- *** 一帯一路フォーラムでの修正**
- 3) 大きな問題
 - 低開発国：中国以外の資金供与国の不在：中国は依然必要
 - 中進国：中国から魅力のある支援なし
 - →中国不要論
 - →中国への要求、条件提示

(図表削除)

FOIPとBRI

- 自由で開かれたインド・太平洋
- 1) 一帯一路への対抗という面
 - (安全保障、アメリカ)
- 2) FOIPとBRIの協調という面
 - アメリカ国務省
 - 日本政府の提示した4条件
 - 東南アジア、アフリカなど